

草野心平「富士山」の学習指導

——わたくしの近代詩の教室——

長崎県立長崎工業高等学校教諭

広瀬節夫

- まえがき
- 一、教材
- 二、目標
- 三、作家研究

- 四、作品研究
- 五、教材研究ノート
- 六、学習指導実践ノート
- 七、読後感想文（かれらのうけとめたもの）

八、反省のことども

あとがき

まえがき

試みては失敗を重ねながらも、近代詩の学習指導法を確立させることは、わたくしの大きな願ひであった。

草野心平の「富士山」をまえにして、わたくしはそのおもいを新にした。

まず、その詩の鑑賞が単なる印象批評に終らないようにと心がけた。しかしそれかといつてあまりに生硬に論理的な追究をしても、生徒の感受性にマッチしないかもしれない。みずから人生観を確立させようとしている生徒には、やはり感性と知性との比重の平均がとれている方法がたいせつである。

そのような意味から、わたくしは、この「富士山」の指導にあたって、生徒各自の感性を母胎として、そこから生徒自身の論理的な思考の萌芽を導き出そうと思つた。

一 教材

富士山

草野心平

川面^{かわづら}に春の光はまぶしくあふれ。そよ風が吹けば光たちの鬼^{おに}こつこおしの葉のささやき。よしきりは鳴く。よしきりの舌にも春のひかり。

どての下のうまごやしの原に。

自分の顔は両手のなかに。

ふりそそく春の光にかえつてもうく。

ながめていた。

少女たちはうまごやしの花を摘みでは巧みな手さはきで花輪をつくる。それをなわにしてなわとびをする。花輪が円を描くとそのなかに富士がはいる。そのたびに富士は近づき。遠くにする。

耳にはよしきり。

ほおにはひかり。

角川書店版の「高等学校国語一総合」(六ページから七ページまで)の「日本の自然」という單元の中に採られている。

二、目 標

この教材で学習すべき重点をあげる。

1 国語自由詩の味わい方を学ぶ。

2 朗読による詩の鑑賞のしかたを学ぶ。

3 詩の内容―要旨・語句・構成・主題を明らかにし、作者の生活感情および自然感・季節感をとらえ、物に接する場合の自分の目・感覚を身につける。

4 詩における表現法、ことばの使い方を知る。

5 詩の朗読のしかたをくふうする。

三、作家研究

(1) 草野心平について

その I

明治三十六年五月十二日福島県石城郡上小川村に生まれた。大正七年平市の磐城中学を中退して上京し、慶応義塾大学普通部に転学したが、中国に渡る準備のため退学し、大正八年十六才で広東に渡り、嶺南大学に入學した。

広東在任中、大正十四年に中国の詩人たちと、同人詩「銅鑼」を創刊した。この年、中国の動乱のため帰国したが、そのとき高村光太郎の知遇をえた。また「銅鑼」の同人として、宮沢賢治、三好十郎などの参加もえた。

昭和三年「銅鑼」を廃刊。その年詩集「第百階級」を刊行した。そのち、種々の職業を転々としたが、そのあいだに、同人詩「学校」（昭和五年刊）、詩誌「鸞」（昭和七年刊）などを発行した。

さらに昭和十年に詩誌「歷程」を発行して、その中心となり、中原中也などもその同人となった。昭和十五年、国民政府の囑託として宣伝部にはいった。しかし、同二十年に、南京で敗戦を迎え、翌二十一年に郷里の福島に引きあげ、同二十二年に「歷程」を復刊した。

その 2

心平はアナキズムから出発して野蠻派^{オリガイズム}へ向かった詩人で、ダイナミックな構想力と独自の語による個性的な表現力を持ち、詩風は雄渾、壮大で、幻想的な音楽性に富み、観念と幻想とのコンプレックスによる観念、叙情的傾向をもち、詩壇に新風を送った。またオノマトペ（擬声音）の使用に特異な才能をもち、好んでこれを用い、一種の野性的な奔放さを表現している。

（「ギギギ……」寒気をあらわす。「ギギギの冬」「しんしん……」雪降りをあらわす。）

その 3

心平は第一詩集「第百階級」（昭 3、11 刊）第二詩集「明日は天気だ」（昭 6、9 刊）に色濃く流れているアナキズムの思想や「絶景」（昭 15、9 刊）の時期にみる著しいフオーヴィズムの傾向、「牡丹園」（昭 23、6 刊）にあらわれた王朝の美意識への傾斜など、詩風の濃淡は指摘できるが、その詩に一貫するものは知性と感性との渾然たる融合、鮮明なイメージ、ゆたかな韻律であり、その詩風を個々の詩集をもって何時代と名づけ区別するのはふさわしくない。

その 4

まえにあげた詩集のほかに、「富士山」（昭 18、9 刊）、「蛙」（昭 24、11 刊）、「天」（昭 26、9 刊）、「亜細亞幻想」（昭 28、9 刊）などがある。

(2) 詩集「富士山」について

その1

昭和十八年刊。富士山についての詩十七編を取めていたが、のちに二編がのぞかれ、九編を加えて二十四編とした。作品名は「作品第壹(一)」「から」「作品第貳拾肆(四)」「まで、作品番号をもって題名としている。教科書にとられたものは、その「作品第肆(四)」によった。

その2

富士山の詩人心平において、富士山は単に富士山としてだけ歌われてはいない。富士山の詩は二十数編を数えるが、ある作品は富士山そのものを対象とし、ある作品は神秘感を主題にする。豊島与志雄氏が「草野心平詩集」の解説で述べているごとく、心平は富士山を「存在を超えた無限なもの、日本の屋根、民族の精神の無量の糧」として歌っている。そして一つ一つの作品は、バラバラのものでなく、二十数編の作品は結びあつて一つの輪をなして、象徴としての富士山が造型されている。

こうした富士山の存在に対して豊島氏はさらに「かく富士山はもはや象徴である。現実の富士山の姿態などは問題でない。けれども象徴は具象を離れては存立しない。心平さんの富士山はやはり美しい。その美しさが平面的でなく、廻り下げられ深められているのを見るべきである。」とのべている。

四、作品研究

1 主題について

この詩の世界は、光と温度と、自然の「音楽」のリズムと、草の

いきれ、うまごやしのかおりとに満ちあふれ、光も生きていれば、富士山も動いている。そこには、自然と人間とに共通する生命が、生き生きと貫流し、躍動している。この詩の主題は「ふりそぐ春の光にかえつてもうく。ながめていた」詩人を包み、そのような詩人にとらえられた、春の自然、風景、物象のすべてを貫ぬいている、生き生きとした生命のリズムである。

2 構成について

第一節 春の陽光を受けて躍動する川べの情景。

全詩の序で「春のひかり」を中心とし、「あしの葉のささやき」と「よしきりの音」がリズムミカルな季節感を歌う自然の声としてとらえられている。

第二節 作者の位置。

どての下のうまごやしの原が、はらばっている作者の位置である。この節は次の節への発展の糸口にもなっている。「うまごやし」は次節の少女たちの姿と、富士との躍動する美を形成する大きな要素である。

第三節 眼前にある広大な自然の中になわとびをする少女の姿と富士山。

全詩のやまである。富士の泉のようにわきあがる生命力が、視覚的、律動的にとらえられ、美の極にまで高められている。

第四節 余情をもって全詩の結びとなっている。

五、教材研究ノート

詩はどのようにして鑑賞したらよいか、ということとは、生徒たち

教材研究ノート

の課題でもあり、わたくしの課題でもあった。そのことは、また詩の特質は何かということを考えることでもあった。
 そこで、わたくしは、「富士山」の指導にあたって、どのようにしたら詩の特質をはあくさせることができるか、ということに留意して、その指導計画を立てた。
 そのために、

I、朗読による詩の鑑賞法をくふうする。
 2、充分に詩情をはあくするために、基礎作業である内容検討を徹底させる。
 3、詩的表現の特色をはあくする。
 という学習の展開を考えた。

時	学習目標	指導項目		指導内容	留意点	配当時間
1	(1)朗読による詩の鑑賞。 (2)内容検討による詩情のはあく。	(i)句の長短(切り方)に表われる詩の発想法の習得。 (ii)節と節とに見る詩想の発展のはあく。	(i)節の切り方。 (ii)語句の意味内容の検討。 (iii)各節ごとの内容検討。	<p>生徒の朗読にあたって句点による正しい切り方を見る。 語尾の正しい発音に留意する。 耳よりして節の切り方を習得する。 序・やま・結びに表われる詩想の相違をつかむ。 句中に表わされている風景・物象を明かにする。</p> <p>作品研究「構成」を参照。 擬人法「川づら、光たちの鬼ごっこ、あしの葉のささやき、遠くにする。」 語のもつ内容(余情、象徴など) (例)I よしきりの舌にも春のひかり。 どの下のうまごやしの原に。 自分の顔は両手のなかに。 かえってものうく。 富士は近づき、遠くにする。</p> <p>助詞「に」。名詞止。 作品研究「構成について」を参照。</p>	<p>問のとり方。 句点の意義。 句点の読点的用法。 脚韻の美。 「できるだけ多くの生徒に朗読させる。音読もさせる。」</p> <p>詩語の習得。 語の叙情的用法と叙事的用法。</p>	35分 15分

34・4・2(木)

時	学習目標		指導の実際		留意点	配当時間
1		(iv) 各節の関連と発展の考察 (v) 主題の正しいは、あく。 (vi) 作者の心情の認識。	(i) 本詩の自由な表現の中に 見る法則の発見。	○序、やま、結びを考える。 ○作者の位置、作者に対する自然、風景、物象のあり方を明らかにする。 ○作品研究「主題について」を参照。 ○自然、美、季節感がいかにとらえられているかを考える。 ○富士に対する作者の目、感覚を明らかにする。	○詩的表現の特色。 ○独創的な物の見方の習得。 (問答、話しあいによる。)	20分
2	(3) 表現法およびことばの使い方の習得。		○自由詩と散文との違いを考える。 △この詩を、行を分けないで、句読点を用いた普通の散文に書き改めさせる。▽ ○拆韻。 (例) 2節∥どての下のうまごやし原に。 自分の顔は両手のなかに。 3節∥花輪をつくる。なわにしてなわとびをする。そのなかに富士がはいる。遠くにすわる。 4節∥耳にはよしきり。 ほおにはひかり。			

2	時
	学習目標
(ii) 語句の特殊用法	指導項目
<p>○感覚の交流による律動性。 (例) 視覚―川づらに春の光はまぶしくあふれ。 視覚―そよ風が吹けば光たちの鬼ごっこ。 聴覚―あしの葉のささやき。 聴覚―よしきりは鳴く。 感覚―よしきりの舌にも春のひかり。 ○語句による時間的経過。 (例) 「少女たちはうまごやしの花を摘んでは巧みな手さばきで花輪をつくる」と「それをなわにしてなわとびをする」との関係。 ○対句の用法。 (例) 耳にはよしきり。 ほおにはひかり。 ○擬人法。 ○名詞止。 ○助詞の用法。 (例) 「うまごやしの原に。」「両手の中に」の「に」に見る意味、内容の比較。</p>	指導内容
○評語の意義。 〔問答、講義併用〕	留意点
	配当時間

34・4・3(金)

時	2		
学習目標	(4)朗読のしかたのくふう (5)作者の理解により近代詩の知識を向上させる まとめ		
指導項目	内容のはあくによる朗読の意義 (i) 作者の経歴、詩歴の理解 (ii) 詩風の理解・文壇的地位の認識。		
指導内容	○学習目標(1)の留意点をいかに消化しているかを見る。 ○朗読が慣習的朗読、朗誦に流れていないかどうかをみ、指導する。 ○主観に流れていないかどうかを検討する。 ○作家研究をプリントして補足講義をする。		
留意点	○詩情への没入。 「注意を与え、生徒の耳よりする鑑賞を行う意味で本をとりて聞かせる。」 ○作者の経歴と詩風の関係。 ○詩風の推移。 (詩の学習の機会が少いし、とくに作者は現代詩人であるから、補足講義に重点をおく。)		
配当時間	10分 10分 10分		
○この詩についての感想文、この詩の教室についての感想文を書かせる。 ○感想文の着眼点。 I 印象批評 2 他の詩との比較 3 詩をよむ喜び (右のうちいずれか一つをえらぶ。) 4 この詩の教室についての感想。 (みんなに書かせる。)()			

2		1		時
				学習 目標
(v)	(iv) (iii)			指導 項目
主題はなにか。	この詩はどのように構成されてい るか。 その各節はどのように関連してい るか。	6 「富士は近づき。遠くにすわる。」 とはどういふ情景か。 7 名詞止めにする、どのような表 現効果があるか。	教師のといかけ	学 習 指 導
	(一) 春の情景・春のひかり。 (二) 作者の位置。 (三) 少女たちと富士山。その対照 (四) 結び。	○なわとびのなわの中に富士が入っ たとき大きくなり、出たときにも との所にすわるように入れる。 ○リンゴを絵のがくに入れたとき と、出したときと、その大きさが ちがうような目の錯覚である。 ○印象が鮮明で、力強くなる。 ○象韻がある。	生徒の展 開 の 応 答	
○小さな紙(四つ 切)に主題をま とめさせる。	○春の中にあるの か。外にあるの か。うまごやし はどうして出て きたか。などを 考えさせて、三 節への糸口をは あくさせる。 ○少女たちのな わとびによつて生 き生きと動く富 士山であること をはあくさせ る。	○それだけにとど まらず、それら が生命のリズム があふれている ことに、注意さ せる。	留意点	
			反省のことも	
30分	20分		時間	所要

31・4・15 (水)

2						時																														
						学習目標																														
						指導項目																														
						学習指導																														
<table border="1"> <thead> <tr> <th>E</th> <th>D</th> <th>C</th> <th>B</th> <th>A</th> <th></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>9</td> <td>12</td> <td>13</td> <td>2</td> <td>M 学級</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>12</td> <td>16</td> <td>7</td> <td>4</td> <td>C 学級</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>21</td> <td>28</td> <td>20</td> <td>6</td> <td>M+C</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>27</td> <td>35</td> <td>25</td> <td>8</td> <td>%</td> </tr> </tbody> </table>						E	D	C	B	A		1	9	12	13	2	M 学級	3	12	16	7	4	C 学級	4	21	28	20	6	M+C	5	27	35	25	8	%	教師のといかけ
E	D	C	B	A																																
1	9	12	13	2	M 学級																															
3	12	16	7	4	C 学級																															
4	21	28	20	6	M+C																															
5	27	35	25	8	%																															
<p>□ (生徒のかいたもの)</p> <p>A 「春の生命力に富んだ景色の中で自分を忘れて春の気持を本当によくあじうために。」</p> <p>「新鮮な光、明るい心、われわれ新入生の喜びをつけているようだ。」</p> <p>「作者ははじめて春を見たかのようだ。」</p> <p>B 「富士山までもが生き生きとしている春のびちびちとした美しさ、明るさ。」</p> <p>C 「生命力にみちたすべてのものが、生き生きと美しく躍動する春の情景。」</p> <p>D 「富士山を中心とした春の情景。」</p> <p>E 「春がやってきたよるこび。」</p> <p>□ (話しあつてまとめたもの)</p> <p>「春の自然・風景・物象のすべてを貫いている、生き生きとした生命のリズム。」</p>						生徒の展開																														
<p>○ 主題のまとめ方に、A・B・C D・Eの五つの型があることを示し、A・B・Cのタイプが妥当であることを理解させる。</p> <p>○ ①については、主題は、これよりさらに深く作者の心情の中に入らなければならぬことを理解させる。</p> <p>○ Eについては、訂正されなければならぬ。</p>						留意点																														
<p>○ 基礎作業の積み重ねが有機的でなかったのかも。しれない。</p>						反省のことも																														
<p>(にめたのいあし話) 10分</p> <p>(にめたのいあし話) 10分</p>						所要時間																														

34・4・15 (水)

時	3	
学習 目標	(3)	
指導 項目	(i)	
学 習 指 導 の 展 開 教師のといかけ	自由詩と散文とはどのようにちがうか。	
生徒の応答	<p>(この詩を行を分けしないで、句読点を用いて散文に書きかえさせる。)</p> <p>(例) 川面に春の光はまぶしくあふれ、そよ風が吹けば、光たちの甕ごっこ、あしの葉のささやき。……どこの下のうまごやし原に、自分の顔は両手のなかに、ふりそそぐ春の光にかえつてものうくながめていた。……耳にはよしきり、ほおにはひかり。</p> <p>○自由詩には省略、みじかい表現が多い。 ——→擬人法</p> <p>○述語が省かれていることが多い。 ——→名詞止</p> <p>○接統詞などがない。 ——→助詞の用法</p>	
留意点	<p>○上記のような三つの意見が出てきたので、語句の特殊用法として擬人法・名詞止・助詞「に」などについて、再確認させる。</p> <p>○つづいて、押韻、感覚の交流・対句などのこの詩にみる表現の法則について話す。</p>	
反省のことも		
所要 時間	10分	

34・4・18 (土)

3				時																				
(5)				(4)																				
まとめ				学習目標																				
(ii) (i)				指導項目																				
感想文のタイプ (A) 印象批評。 (B) 他の近代詩との比較。 (C) 詩をよむ喜び(意義)。				学 習 指 導																				
				教師のといかけ																				
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <tr> <td style="width: 25%;">C</td> <td style="width: 25%;">B</td> <td style="width: 25%;">A</td> <td style="width: 25%;"></td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>7</td> <td>23</td> <td>M 学級</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>4</td> <td>32</td> <td>C 学級</td> </tr> <tr> <td>10</td> <td>11</td> <td>55</td> <td>M+C</td> </tr> <tr> <td>14</td> <td>14</td> <td>72</td> <td>%</td> </tr> </table>				C	B	A		7	7	23	M 学級	3	4	32	C 学級	10	11	55	M+C	14	14	72	%	生徒の応答
				C	B	A																		
7	7	23	M 学級																					
3	4	32	C 学級																					
10	11	55	M+C																					
14	14	72	%																					
				留 意 点																				
				反省のことも																				
20分				所要時間																				
15分				5分																				

31・4・18 (土)

七、読後感想文

(かれらのうけとめたもの)

この詩の学習が終つてから、読後感想文を書かせた。読後感は今までに何度か書かせたことがあるが、そのほとんどが、おもしろい・つまらない・好き・きらい、というような印象・感想・鑑賞の形か、よい・わるい、すぐれている・劣っている、というような批評の形か、あるいはそれらが複合された形で表白されていた。そこで、この詩の読後感については、それよりさらに進んで、何が、どういふ点がそういう印象なり感想なりを与えるのか、なぜ「おもしろい(つまらない)」のか、ということを反省し、指摘し、表白するように、という書くまえの指導をした。またさらに問題を発展させるために、すでに知っている他の現代詩(近代詩)などの比較や、このような詩を読むことの喜び(意義)などの着眼点もあげた。こうして出てきた感想文のいくらかをあげてみよう。

(a) 印象・感想・鑑賞・批評

「この詩をよんで、まず感ずることは、よみやすいということである。そして作者がいろいろとしている春の美しい情景、少女たちの姿などがあざやかな印象を読者に与えることである。それは、この詩の表現法がよいからであらう。例えば、擬人法を使つたり、名詞止めや文章の語尾の字をそろえたりしてあるからだ。」(M・U生)
「なんとなく親しみがわいた。それは草野心平がごく自然に、ありふれたことばで、寓意的に表現しているから。」(C、Y生)「ひよっこり読んだらどういふことを書いてあるのかわからない。単純

素はくは言葉で情景が描かれていて、その意味は大変深く微妙である。それがだんだんわかつてくると、「あゝ、そうかなるほど！」と大変印象に残る。そのことはほんやりとしてるようで鮮やかである。」(C・S生)というように、まず素朴な表現の中にひそむ微妙なものを指摘しようとしている。それでは、どうして、そのように単純素朴な表現の中に深いものがひそんでいるのだろうか。

かれらの目は草野心平の「富士山」のとらえ方に向けられる。「富士山」の見方がちがっている。それは少女たちの花輪を通して富士山を見ているため、富士山が動いているように見える。それによって普通見る富士の美しさとはちがって、また別の美しさがある。」(M・H生)「それから富士山という題であるのに、富士山がちよっとしか出てこないことがかえって富士の印象を強めた。」(C、O生)「立体感がにじみ出ている。なぜなら富士山が近づいたり、遠のいたりする様子が目の前に表われてくるようだから。」(C、N生)「自然の動かしがたい『山』を動かしている作者の筆、一層生き生きとした偉大な力である。またそれと対照的に自然を細かく見つけている。これが『富士山』を生かす材料である。」(M・M生)と。こうした富士山の独特なとらえ方と、「たくみな擬人法で詩全体を短かくひきしめ」(C・O生)「普通の詩では満足せず自分に工夫した作者独特の表現」(C・K生)とがあいまって、草野心平の詩をより深いものにしていくのである。

これらのほかに、「この詩は、春の明るさ、自然の生命の力強さ——自然と人間を比較すると人間はほんの一部分のように思われる。」(C・M生)とか、「この詩は作者が自分の中にある童心を引き

出して幻想的に作りあげたものである。」(C・K生)とかの感想も生まれてきた。

(b) 他の近代詩との比較

「いままで自分が読んだ詩はしんみりとしたものや、情景の美しさなどを中心にしたものであったが、この『富士山』だけは、他の詩にくらべ、美しさというものはないが、実際に音が聞えたり、実際に情景が見えたりするようである。」(C・T生) というように、印象的に比較したものがあがるが、次のように作品例をあげて比較したこともある。

「高村光太郎の『道程』や『冬』などは、道や冬にたとえられた人生観や人生のきびしさなど学ぶところが多いが、心平のこの詩は学ぶというより、あじわりという方が適切である。『道程』『冬』などは、人生に対する経験がないと書けないが、この詩は自然をすなおにながめればできるようだ。」(C・Y生) などはすでに批評の段階までできているものである。

(c) 詩をよむ喜び(意義)

「詩を読む喜びというものがなんだか解ったような気がする。」(C・H生) というばくせんとした受けとめから、「詩をあまり読んだ経験のない僕にも喜びはある。散文を読んでいる気持と大変ちがっている。詩をよんでいると短いながらもそのことが自分と一つになり、ある光景が自分を包んでくるような気がする。美しい自然の中に自分が身をなけて読んでいるようなとき、その喜びは極に達するのである。」(C・T生) のように、だんだんはつきりしてくる。そして、「詩など何の関心もたなかった私に、初めて詩を

味わせたのが、『富士山』であった。春の喜びを新鮮に、しかも生き生きと描いているこの詩を読んで、何か大きな希望と生きる喜びを与えられたようだ。冬の後には必ず春がやってくることを。」(C・K生) という喜びに到達するのである。そしてさらに、その

喜びをみんなものにしようという願いに高まってゆくのである。「日本の国はせまくて、人口が多いので、人の心までがせまく、狭くながちである。この『富士山』のように、暖かくて、広々として、はつらつとした詩が広く読まれなければならない。」(M・Y生) と。

ていどの差はあるが、かれらの書いた感想文の中には、草野心平の詩に、何かを探し、求めようという気持があふれている。

八、反省のことども

さいごに、生徒たちが書いた「草野心平の詩の教室についての反省」を参考にしながら、わたくしの実践について反省してみよう。

(一) 詩の鑑賞の方法

「楽しかった。よく理解できたから。」(C・K生) 「この詩を読んではから詩というものにいつそう興味があいた。それも鑑賞のしかたがよかったから。」(C・Y生) 「過去に詩をいろいろあじわってきたが、この『富士山』の学び方は、実に広範囲にわたっての深い詩への学習でした。中学校で擬人法・名詞止め・助詞の使い方など習ってきたが、たったこれだけのみじかい詩の中に、これほど巧みに使っていると思わなかった。今度の授業で『富士山』を深

く、丹念にほりさげられたが、たったこれだけに、これほど多くのことが表現されているのかと思うと、詩の偉大さがわかるような気がします。詩のあじわい方は、あらゆる角度から調べてはじめてあじわえるものだとつくづくうなずかされました。

今まで詩とはそれを読んで想像するといひと考えていました。しかしここで詩を鑑賞して、表現の仕方なども深く研究すべきだと知りました。興味のなかつた詩が面白くなった。」(M・Y生)というような感想を、学習者の五割(残りの五割は、わたくしの話のしかた、指名のしかた、話しあひの方法などについての意見や要望が書かれているが、これは別の機会にまとめた)が述べている。

ところが、「いろいろノートに書いているが、一体この要点は何であろうか。」(C・S生)というような疑問も出されている。これは、学習目標があまりにも広範囲にわたつたためと思われるが、もう一つには、これらいくつかの指導目標が有機的なつながりをもつて指導されなかつたからではなからうか。

(2) 詩の朗読

すでに詩情のはあくの作業が終つてから、みんな目をつむつて一人の朗読を二回ほど聞いた。そのことについて、次のような感想が生まれてきた。

「最後にやつた目をつむつて静かな環境につつまれて説んだのは、効果的であつた。詩全体が階段を一段一段とのぼるように身に入つてきた。」(C・T生)「第一回目に読むときはどんなことを歌っているのかということだけを頭に入れて読んでしたが、その内容を全部理解してから読むと、その詩の情景が目にくるよう

ある。」(C・O生)
これらは、内容のはあくによる朗読の意義が大きいことを物語つてくれるものである。

(3) 教材としての近代詩

教材としてどのような近代詩を選んだらよいかといふことは、詩の学習指導にとつてたいせつな問題である。わたくしは、草野心平の詩の他の例として、「秋の夜の会話」をあげた。するとほとんどの生徒が、このような詩をこれからもどしどし読みたいといふ感想をもらしてゐた。

教科書にあげられているのは、いわゆる名詩として愛誦されている作品が多い。しかし学習者の方で求めているのは、親しみのあつた、生活感情のあふれたものではないだらうか。

(4) 詩の感想文

この詩についての説後感想文をできるだけ書きやすくするために、(a) 印象批評、(b) 他の現代詩との比較、(c) 詩を読む喜びなどの着眼点をあげた。それについての統計は、学習指導実践ノートにあげているが、(a) が72%で最も多く、(b)(c) はそれぞれ14%で比較にならないほど少ない。このことは、わたくしの学習指導が、この詩を理解することに重点がおかれたために出てきた結果であらう。(b) とか(c) とかのタイプの感想文がもっとたくさん出てくるように、問題を発展させる学習をさせなければならぬ。

着眼点をあたえて感想文をまとめるという作業は確かに効果的であるが、自由に書いたものと比較するとき、そこにはあまひダイナミックな感想を期待できない。詩の感想文の場合には、むしろ着眼点などあげない方がよいのではないだらうか。

あとがき

私は公園を美しくする天使なのである。

(原文のまま)

私は芝生である。私は芽である。
私は公園の芝生の芽なのである。
つもとられても ふまれても

「富士山」の学習が終って、わたくしは生徒たちの学習ノートを出させた。そしてNという生徒のノートにこのような散文詩が走り書きしてあるのを発見した。

上に石をのせられようとも
必ず芽を出して大空をみたいのである。
人にたたかれようが
ふみにじられようが
私はその苦しき そのつらさにも
たえぬく力をもっている。

詩の鑑賞の次にやってくるものは、詩の創作であるが、それを生徒のすべてには強制できない。しかし、こうして自然に口をついて出てきたものの中に、たとえその表現はまざくとも、詩というものがひそんでいることを発見してやることはたいせつなことである。

(昭和34年9月24日稿)